ブルジョア社会の進化の法則の一つ

三九八　ヴェ・ヴェ・アドラツキーへ

同志アドラツキー！

つぎの二資料を見つけるのを手つだってもらえないでしょうか。

（一）　エンゲルスが、1648 年と 1789 年の経験にもとづいて、革命は、あまり重要でない改革を確保するためにも、その力にあまるところまで前進することを必要とするという法則があるように思われる、と言っている論文（または小冊子？　手紙？　の一節）。

たしか、これは 1908 ― 1912 年ごろのわがボリシェヴィキの在外新聞（『プロレタリー』？）にのったと思うが、はっきり覚えていない*。

（二）　1853 年 4 月 12 日付のエンゲルスからヴァイデマイアーへの手紙。教えてもらえれば、たいへんありがたい。

レーニン

事項訳注P855＊　レーニンは、エンゲルスの論文『史的唯物論について』（『空想から科学への社会主義の発展』の英語版序文）のつぎの箇所を念頭においている。「その当時すでに収穫できるまでに成熟していたブルジョアジーの達成物を手にいれるためだけにさえ、革命はかなりさきまですすめられなければならなかった。これは、1793 年のフランスや 1848 年のドイツのばあいとまったく同じである。このことは、実際、ブルジョア社会の発展法則のひとつであるように思われる。」（本全集、第 15 巻、43 ページでの引用、また『マルクス＝エンゲルス二巻選集』、第六冊、159 ページを参照）。

ヴァイデマイアーにあてたエンゲルスの手紙――『マルクス＝エンゲルス全集』、（ディーツ版）第二八巻、575 ― 582 ページを参照。

第 45 巻 P369-370『ヴェ・ヴェ・アドラツキーへ』1921 年 9 月 20 日に執筆　1933 年に『レーニンスキー・ズボールニク』第 23 巻にはしめて発表　手稿によって印刷

参考に前後も含めて引用する　　（新日本文庫　石田精一訳　英語版への特別の序文）

「……それはとにかく、その自営農民（ヨーマンリー）[(yeomanry)]がおらず、都市の平民分子[賤民(Plebeian)要素]がいなかったら、ブルジョアジーだけではけっして戦いをあくまで戦いぬかなかったであろうし、けっしてチャールズ一世を断頭台におくりもしなかったであろう。当時すでに熟して刈りとるばかりになっていたブルジョアジーの戦果を確保するためにさえ、革命はかなりさきまですすめられなければならなかった――1793年のフランスや1848年のドイツとちょうど同じように。これは、事実、ブルジョア社会の進化の法則の一つであるように思える。

ところで、このような革命的活動の行きすぎにつづいて、必然的に不可避な反動がやってきたが、それもまたふみとどまってもよい点をこえてすすんだ。一連の振動がつづいたあと、最後に新しい重心に達し、それが新しい出発点になった。お上品な人びとには「大反乱（グレート・リベリオン）*」[(“the Great Rebellion”)]の名前で知られているイギリス史上の偉大な時期と、それにつづく諸闘争は、自由主義的（リベラルな）歴史家によって「名誉革命（グローリアス・レボリューション）**」と名づけられている[1689年の]比較的ちっぽけな事件によって幕をとじたのである。」

注）[]内の表記は「岩波文庫　大内兵衛訳」による。

＊新日本文庫の注記

イギリス大革命（1642 － 49 年）――清教徒（ピューリタン）革命ともいう。この革命は1642年8月、国王が議会に宣戦を布告したことからはじまった。議会は軍隊をつくってこれと戦い、1649年1月、下院はイギリスを共和国として宣言し、国王チャールズ一世を処刑した。この革命のなかで下院議員のオリバー・クロムウェルは軍隊の指揮権をにぎり、国王に味方する勢力に反対するとともに、平等派などの徹底した民主主義を要求する運動を抑圧した。

＊＊新日本文庫の注記

名誉革命（1688 年）――イギリス大革命のあと 1660 年には王政が復活し、チャールズ二世が国王になったが、かれの死後、1688 年にスチュアート家の王朝を倒してオレンジ公ウイリアム三世が王位についた政変を名誉革命という。イギリス国会は、新国王に「権利法案」を署名させ、議会の権力を拡大した。

＊＊岩波文庫の注記

国王ジェイムズ二世と対立した議会がオランダから総督ウィリアム三世を招いて国王を交代させ、権利章典を認めさせた事件。これにより議会が政治の主体となった。この過程は血を流さずに行なわれたので名誉革命の名がある。